

周星著

道在屎溺——当代中国的廁所革命

(道は屎溺に在り)——現代中国のトイレ革命

商務印書館／2019年10月／300頁／45元



黄 潔

はじめに

本書は、元々悪評の高かった中国の公衆トイレが社会運動や国家政策により整備されるという、現代の中国で展開されているトイレ革命に焦点を合わせ、中国を含む東アジア、さらに世界各地におけるトイレ文化の様々なありよう、およびそれぞれの地域で起こってきたトイレの文明化プロセスを論じた大著である。中国のトイレ革命とは、一般的には、市民の健康や生活水準の向上を図るため、特にこの一〇年来、中国政府が上から下へ、都市から農村へと取り組んでいる衛生的なトイレの普及を目標としたプロジェクトのことである。

また、本書は、中国で最も一般的かつ伝統的なトイレ文化やトイレ革命をテーマとした、民俗学・文化人類学など関連分野における最初の成果である。「はじめに」で記されているように、著者が一九八二年に民族学を専攻して中国社会科学院の修士課程に入学して以来、普段の日常生活に対する関心や考察をもとにし

て、三〇年以上かけて発表してきた学術論文を大幅に加筆したものであり、著者にとって「やらないといけない研究課題、運命的な仕事」(二頁)にあたると思われる。その意味で、これまでの著者の中国のトイレをめぐる研究の集大成的な成果のひとつであるといえる。

著者は、元々文化人類学(民族学)を専門としてきたが、日本でポストドクターを務めた頃から近接領域である民俗学分野に関する体系的な知識を身につけるようになった。本書は、著者がネイティブの文化人類学・民俗学の視点という、日本においても中国においても斬新な見方を探って、長年研究を続けてきた課題の成果でもある。そのため、ネイティブの人類学を内部へとより深化し、文化人類学と民俗学の双方が生産的な相互補充を促す学術研究を積極的に実践するという著者の狙いを反映したものとなっている。

本書の対象は、中国社会における排泄物の処理方法とトイレという空間をめぐる観念と行為や実践である。特に「トイレ

レ文化の多様性」「トイレの文明化プロセス」「トイレをめぐる都市／農村、公的空間／私的空間、自己／他者などの差異」「トイレの改良と国家イメージおよび個人のプライバシーの改善との関連」(二二三頁)などの主な議論の論点を整理して論じている。また、本書は中国語の研究文献だけでなく、トイレやトイレ革命に関する日本語の研究資料も多く参照している。それは、著者が一九九二年より、日本での長期的な研究に取り組んだ経験によっている。そのため、トイレ革命について言及する際に取り上げる事例は、かなり長い歴史的な時間や、広い範囲の地域をカバーして詳細に考察されている。

以下では、まず各章の内容を概観し、そのうえで若干のコメントを述べたい。

本書の概要

本書は以下の一二章および二本の関連する論文から構成される(筆者和訳)。

はじめに 問題意識とキーワード

第一章 農耕文明のトイレ文化

第二章 社会運動とトイレの改良

第三章 文明形態の転換——外部の批判と内部の反応

第四章 トップダウンの努力——国家イメージの改善

第五章 公共性——観光トイレから都市の公衆トイレまで

第六章 農村におけるトイレ改良の実践

第七章 トイレ革命をめぐるディスコース

第八章 「トイレ文明」のグローバル化

第九章 東アジアにおける「トイレ文明」の発展

第十章 バスルーム——生活の品質を求めめる正当性

おわりに

附録一 排泄・生育・結婚——隠喩としての「馬桶」のパワー

附録二 「不潔・清潔」に関する觀念の変容とトイレ革命

後書き・謝辞

この章構成に示されるように、本書は、トイレの文化と改良の実践に焦点を合わせたものである。「はじめに」では、問題意識とキーワードについて述べ、具体的に、全体をつらぬく三つのキーワードについてまとめている。一つ目は、「トイレ文化」であり、異なる地域社会のもつトイレに関する特定の習慣や設備を指す。二つ目は、「トイレ問題」であり、社会の文明化のプロセスの中で生じたトイレに関わる問題のことである。三つ目は、「トイレ革命」であり、ある社会において、民衆の内発的なニーズの高まりや国際社会からの刺激などの外発的要因により、人々の排泄行為の管理や排泄物処理施設とその関連システムの改善などが行われることを指す。

そして、トイレ革命に対する分析について、「五つの領域に関して論ずる」(八頁)と述べる。それらは、「都市化／現代化した一般住宅におけるトイレの普及」「観光スポットにおけるトイレの質の向上」「市政の公共サービス施設に設置されるトイレ革命」「農村トイレの改良

運動」「政府機関などの公共トイレの一般開放」（九頁）の五つである。

第一章では、まず冒頭で「トイレ文化」がさらに詳細に定義され、「どのような社会集団にも設定される人々の排泄行為およびその排泄物に対する管理、制限と処置に関する規範と施設」（一〇頁）と定義されている。また、水洗トイレと汲み取り式トイレ（「早廁」）を事例として取り上げ、中国と西洋、中国の南部と北部、さらにより細かい地域間のトイレ文化の差異が説明され、特定の地域単位において、トイレに関する文化が日常生活の中で形作られる各種の基本的な規範や習慣に制限されることが指摘される。この章の五つの節において、著者は主に次の三つの論点について論じる。すなわち、(1)中国やその他のアジア諸国における糞尿を農家の肥やしとする伝統は、農耕文明と密接に関係していること。(2)伝統的に農民たちは、居住する地域や所属する民族ごとに異なる糞尿の処理方法と関連する施設の設置方法および、関連する観念を作り上げてきたこ

と。そして(3)各々の社会に生活する人々はこのようなトイレに関する観念に基づいて、富の象徴とされる便器、トイレの神信仰やタブー、家屋風水など、多様な地域・郷土の文化的知識を生み出したこと。また、そうした観念や知識は、都市と農村における異なる社会分業や、排泄物と排泄空間をめぐる人々の清潔／不潔の観念と衛生の観念にもある程度影響を与えてきたことである。

第二章では、「衛生」という概念の伝統的な意義（主に個人レベルで、身体や生命を養うこと、長命にすることを意味するほか、医療や医薬をも含む）（四一頁）と近代的な意義（主に国家レベルで、民衆の健康を保護することを意味する）（四二頁）をめぐって、清朝末期のアヘン戦争（一八四〇年）における「衛生救国」思想に始まり、歴史上中国で何度も繰り返されたトイレの改良に関わる社会運動について論じられている。具体的には、「光緒新政」（一九〇一〜一九一一年）の際に制定された清潔・衛生に関する法律の規範、また、一九三〇年代か

ら始まった「新生活運動」におけるトイレと飲用水の改良に関する規範、一九五〇年代の「愛国衛生運動」の際に疾病予防措置のために実施された衛生清潔に関する規定、さらに近年農村で広く行われているトイレの改良を中心としたトイレ改革運動などが取り上げられている。このように中国近現代の歴史上どの時期であっても、中国政府は衛生の面で特にトイレに対する改良措置を実施してきたことがわかる。

第三章では、一九五〇年代以来の中国の実情を踏まえながら、なぜトイレの問題が中国の現代化と発展にとって無視できない、比較的深刻な問題であるかが、詳細に論じられている。そして、中国社会がそれを意識するようになったのは、次のような内因と外因の相互作用によって引き起こされたからであることが指摘される。内在的な原因としては、前述のように、糞尿などの排泄物を肥料とする農耕文明の伝統が、一九六〇年代以降に化学肥料を利用する現代科学技術の生産方式に転換し始めたことと、一九八〇年

代以降、都市化が進むにつれて人口が急増し、公衆トイレ問題の改善などのいわゆる農村の文明形態から都市的文明形態への変化が必要となったことがある。また、外在的な原因としては、一九七八年の改革開放以降、中国を訪れた外国人観光客などが、中国のトイレ環境に対する不満や批判を表明したことが指摘されている。

第四〜第六章では、著者は大きな紙幅を割いて、「はじめに」で言及されたトイレ革命に関わる五つの領域に関して議論している。各領域間相互の関連に基づいて、著者は三つの主要な議題を三章に分けて論じている。第四章では、一九八〇年代以降、特に国家の祝典や観光開発の場において、公衆トイレが国家イメージに深く関わりとされたため、中国政府（地方政府を含む）が行政機関や観光施設などにおける公衆トイレの改良に取り組んできた努力と実践（いわゆる「公衆便所の改造運動」（九五頁）が論じられる。第五章では、主にトイレの「公共性」をめぐる、都市の公共サービス体系に

おける公衆トイレが一般の人々の「民生」問題とも関わること（九八頁）が論じられる。著者は、清潔感のある使用環境が整備されており、使用行為のプライバシーが保護されていれば、現代の人々は質の高い日常生活における満足感や幸福感を感じられると指摘する。そして第六章では、観光地や都市だけでなく、農村部でも生活の質の向上を実現すべく、一九九〇年代以降、中国の衛生行政部門が、観光開発と小康社会の構築を機に、広範な農村におけるトイレ改良の実践をも推進してきたことが紹介される。

第七章では、以上のような数十年間に中国で行われたトイレ革命の具体的な実践を踏まえ、主に「トイレ革命の必要性、緊急性、合理性および可能性」（一三五頁）をめぐる、中国社会の公衆メディアで用いられているディスコースが体系的に整理される。そして、著者は現代中国社会におけるトイレ革命の重要性を証明するために、公衆メディアが主に「発展」、「衛生（科学）」と「文明論」などの三つの言説とトイレとを関連

づけて議論する傾向にあったことを指摘する。一方、公衆トイレの改善は政府が国民に提供すべき基本的な公共サービスであるが、こうしたトイレ革命の「公共性」という点に関しては、公衆メディアや政府のディスコースではあまり言及されず、しかも行政機関や住宅団地などの公共施設に設置される公衆トイレは「外部者の使用禁止」措置がとられる（一二五二頁）など、まだまだ多くの不備が存在する。著者は、そうした状況は中国の社会階層間の格差や、都市と農村の間の格差が依然としてある程度存在することを反映していると論ずる。

第八章では、トイレの文明化の過程について集中的に議論される。著者は、本章の冒頭で、アメリカの人類学者が提起する、「衛生」状況の変容はヨーロッパ人が農村生活から都市生活に移行することを示す、という論点が、現代民族国家の衛生体制下に生じたトイレの問題を説明するには適していないと指摘する（一二五七頁）。そして、各節の議論において、著者はトイレの文明化に関する自ら

の主な見解を述べている。具体的には、第一節では、人々の基本的なニーズの満足度が高まるにつれて、トイレの状態が徐々に現代社会の文明度の高さを証明するものとなってきたと論じる。第二節では、トイレ革命のグローバル化の過程を理解するために適切な理論はエリアスの文明論であることが指摘される。特に、特定の社会において、人々の行為と感覚がある方向に変化し続けることは、入念な計画と検討の結果ではなく、外部からの様々な強制力が次第に内化され、自己強制や自己コントロールが行われるようになった結果である、というエリアスの文明論の知見は、現在の中国で起こっているトイレ革命のプロセスにもあてはまるとする。それを詳しく説明するために、第三節では、台湾・香港・上海・天津・青島・広州などの植民地や租界になった経験のある都市で、当局が衛生防疫と下水道処理の条件に基づいて、華人の居住するコミュニティに対する隔離政策や接触制限措置を行ったことについての考察がなされる。この事例分析を通じて

て、著者は当時のトイレの文明化は外国当局の強制力により実行されたように見えるが、実はその強制力を内化した人々が自覚して文明化に向かったことも無視できないと指摘する。

第九章では、トイレ革命を率先して成し遂げた日本に目が向けられる。著者の考察によると、日本のトイレ文明も、ほぼ農耕文明から工業文明と都市の時代への転換を経て生じたものだが、その後、様々な改革を通して、東アジアのトイレ文明をリードするようになり、「世界トイレ機関」(WTO: World Toilet Organization)の活動に積極的に参与し、多くの貢献を果たしたことが明らかにされる(第一節)。また戦後、韓国やシンガポールなどの東アジア・東南アジアの国家、さらには中国の北京、上海などの主要都市、およびマカオ、台北でもトイレ革命が始まり、トイレの改良が行われるようになったと論ずる(第二節)。最後に著者は、中国社会的トイレ革命が成功するために不可欠な条件は、自身の伝統文化に対する自覚によるトイレ文明の

向上のための行動と実践にあることを提示する。

第十章では、資産の増加による人々の生活品質向上の追求から、現在も行われているトイレ革命と公衆便所の文明化、および人々の日常生活におけるトイレをめぐる行動の変遷について考察がなされる。例えば、現在一般市民はトイレについて語る時、中国語の「廁所」でなく「衛生間」という相対的に上品な表現を用いる(二〇七頁)。このようにトイレをめぐる品位向上の原動力は、経済発展と市民生活水準の向上を背景とした、多くの民衆のもつ品のある美しい生活に対する渴望であると指摘している。

結論では、本書のタイトルに用いられた「道在屎溺」という文言に関連して、トイレとトイレ革命を議論してきた理由が改めて提起される。また著者は、トイレ革命の推進とトイレ文明の向上は、最終的には民衆の意識的自覚と衛生観念の向上によって実現できると強調する。

なお、本書には排泄物の処理方法とその器具や空間に関連する民俗文化について

ての研究論文が二つ収録される。一つは「馬桶」（中国の農耕文明を表す伝統的な便器の一種）と呼ばれる排泄物の空間を日常生活の道具として考察し、一般の人々の婚姻習俗における重要な意義とその変容を論じたものである（付録一）。もう一つは、文化人類学と民俗学の立場から、人々の排泄方式と排泄物の処理方法をめぐって、「不潔／清潔」の観念とその相互関係を整理して考察したものである（付録二）。それらの論文で言及された排泄物に関する象徴意義とケガレの観念は、本書の対象となる排泄の行為や観念に深く関わる核心理念であり、本書のテーマであるトイレ革命の重要性と必要性に関する論証にとって有力な補足説明となっていると論じられている。

コメント

以上のように本書では、この数年来中国社会で行われつつある、トイレ空間と環境の改善は誰のどのような実践によって如何になされているかについて詳細に描かれている。評価すべきところは、少

なくとも大きく三つあると考えられる。

第一に、排泄行為や排泄物、トイレに関する問題を単に衛生問題として扱い検討するのではなく、それらをより複雑な総合的背景を有する現代中国の社会的・文化的問題と位置づけて論じている点である。「はじめに」で著者が述べるように、排泄やトイレに関する問題は、衣・食・住などと同様に小さなものであり、通常まったく意に介されないものの、避けては通れぬ日常生活の一部である。清末・民国初期から現在にかけて、中国人の排泄行為およびトイレに関する衛生状況は、諸外国から非難を浴び続けてきたため、中国社会において長年懸案であり続けた問題といえるが、この問題は、二〇一〇年以降によりやく転換の時を迎えた（五頁）。著者は、現代中国で生じたトイレ革命について概観を取りまとめ、それが現代中国の大規模な生活革命の重要な一環であるという視点を提示することを目標としてきた。

第二に、トイレ革命に関して、一般の人々の行動よりも、国家政府やメディア

などを主体とする都市や観光地・農村における実践に着目した点である。こうしたトイレ問題は、政府やメディアが共に関心をもつ課題であり、市民と郷民の生活レベルの改善とは切っても切れないほど密接な関係があるが、そうした公共の問題は従来の民俗学者からは軽視されてきたのである。この意味から、本書は中国におけるトイレ革命の社会的、歴史的、文化的な背景と意味を深く理解するうえで、非常に重要な学術的価値を持っているといえる。

そして第三に、ネイティブの中国人人類学・現代民俗学の視座からトイレ問題を取り上げることが試みた点である。本書の議論によると、日本社会で生活しそこでのトイレ革命の成果を直接的に体験してきた著者は、トイレに関連する問題をめぐって中国社会において丹念なフィールド調査を行ってきた一方で、中国という〈時と場〉から抜け出して、冷静な考察のもと、中国社会の一般大衆や民生に関する議題を提起し、また、日本という先進国の基準と比べて、ほど遠い状況に

ある現代中国社会の厳しい現実的な問題に直面し、自らの設定した学術的課題の目標を達成するよう努力してきたとする。中国と日本で長年調査を続けてきた著者の経歴は、こうした視座からの研究を行ううえで、大きな資産となり得るものであると思われる。

その一方で、若干の疑問点も存在する。第一に、本書では、特定の地域社会を深く調査したうえでミクロな視点での分析が不足している。主な資料として参照されているのは、中国農村社会を対象とした社会学、人類学、歴史学、考古学などの分野において、中国に生まれ育ち、中国をベースに活動している人々が書いた研究成果から切り取られた、排泄行為やトイレの状況に関する記述や、当時のトイレ革命に関する中国語の新聞記事などである。だが、それらの資料がネイティブの人類学とどのように結びつくのかは、やや判然としない。また、興味深い事例が多数紹介されているものの、個々の事例がそれぞれどのように関連し、あるいは本書のキーワードの一つで

ある「トイレ文化」と関わるのかという点も、必ずしも明確ではない。

第二に、本書では日本を中心に韓国、シンガポールなど東アジア・東南アジアの諸国におけるトイレ事情が参照されているが、それぞれの事例と中国のトイレ革命との間の比較考察が十分になされていない。そのため、中国にとってのトイレ革命の必要性は理解できるものの、具体的にどのように革命を実行するべきかについて、詳細には論じられていないのである。また、こうした比較研究は、ネイティブの人類学と民俗学の構築という著者の視点にとつて重要であるはずだが、本書の中でそれが達成されているかについては疑問が残る。

ただし、これらの疑問点は中国の人類学者による初のトイレに関する研究書であるという本書の意義を何ら損ねるものではない。著者は叢書の総序文において、ネイティブの人類学と民俗学の二つの視座を架橋することにより、異域／故郷、他者／自身、外国語／母語との間で多くの興味深いテーマを見出せると指摘

する。こうしたテーマの探究は、人類学と民俗学の研究者にとつての課題であるといえるだろう。著者が述べるように、それはまた、「邁向人民的人類学」（人民の人類学に踏み出す）という費孝通の理念の実践にとつても大きな意義を有していると考えられる。

なお、本書はほぼ同時に出版された著者の新著『生熟有度——漢人社会及文化的一項結構主義人類学研究』（商務印書館、二〇一九年）と『百年衣装——中式服装的譜系与汉服運動』（商務印書館、二〇一九年）の姉妹篇にあたると思われる。本書の読者には、中国における文化人類学と民俗学に関する近年の研究動向をより深く理解するために、これらの著書をおわせて読むことをおすすめしたい。